

名古屋時代の小口先生

赤池 憲 昭
(昭和41年修士課程修了)

先生ご自身が語られたエピソードは数々あるが、なかでもこの話は傑作の一つとして、先生に身近かな人々の間で広く伝えられているものである。

名古屋市の東部に「極楽」という地名がある。今では周辺に団地や学校もでき、かなり賑やかな場所になっているが、開発は近年のことで、それまでは知られることが少なかった。先生はその特有の嗅覚で、早くからこの地のお値打ちの居酒屋をごひきにされていたらしい。あとで知ったことだが、大学のある日進町から、直接丘越えの道路を走ると、意外に近い所にある。

例によって、ウィスキー入り紅茶を仕込んで下地を作られていた先生が、帰途、スクール・バスを降りられて地下鉄の駅付近で客待ちしていたタクシーに乗り込まれた。

車は早速スタートした。

「極楽までやってちょうだい。」

「エッ、どこですか。」

「極楽まで。」

「ゴクラク？ だんなは酔ってるんだわ。しっかりしてちょうよ。」

「酔ってないよ。君、極楽知らないの？」

「だんな。こっちは忙がしんだから。冗談いわんと。」

「冗談なんかいってるか、極楽!!」

運転手は血相を変えてブレーキを踏んだ。

「降りてちょ!! こっちはまだこまい子供があるんだ。ゴクラクなんかつき合えね!!」

ご機嫌の好いときのややくぐもった口調で水割りをなめられながら、「運ちゃんにおこられちゃったんだよな」と結ばれるのが常であった。

先生の名古屋時代は、昭和四五年の四月から逝去される六一年十二月まで、一七年間弱にわたる。毎週東京と名古屋を往復される生活に、初めの頃はかなり閉口されていた。当時は「新幹線教授」の走りの時代で、この名称自体には先生も悪い氣はされていなかったご様子で、「名刺の肩書きに刷っとくか」と笑っておられた。しかし、ズボラな先生にとって、実際上は面倒この上ない称号であったのだろう。みるみる足が遠のいてしまい、小判餃のごとく先生の巨体にへばりついて名古屋に来た当方は、大いにあわてたものであった。

先生のお人柄を一口でいい切ってしまうことなど失礼でもありできる筈もないのだが、私一個の印象だけで申し上げれば、先生はやはり「寂しがりやさん」であったと思う。

先輩などの話で、小口先生はこわかったと聞くことがあり、事実、私の体験でもその咆哮に憶えはある。しかしそれは所詮、で自分の本質のテレ隠しであったり、ご自身の真意が通じないことへのいら立ちに過ぎなかったのではなかろうか。先生のお酒も多分に自分をまぎらわすためのものであって、最初から好きで始められたものではなさそうである。先生のそれとないサーヴィス精神や賑やか好みも同じことだろう。

したがって、名古屋に先生の心を満たす要素が増すにつれて、漸次先生の足は名古屋にとどまることが多くなった。おそらく、五一年の名古屋での日本宗教学会あたりから、先生の天秤に微妙な変化が生れたと思う。

ただその頃から、酒の飲めない私は、先生と行をを共にする機会が少なくなった。代って院生が招待を受けていた。なにしろ般若湯で鍛えた連中だから役に不足はなかったようである。そんなこともあって、先生はひどく学生をかわいがられた。表側だけでなく裏側で学生と膝を交えられる大学教授は、先生はどのご年輩ではきわめて稀少価値が高いのではないか。つまり、先生はそれほど「正直」なお人柄だったということである。時には「正直」すぎてこちらがアタフタしてしまうこともあった。

晩年の先生はむしろ名古屋潰けになっておられたとあってよい。大学の枠を越えて市民との直接のふれ合いにまでその幅を広げられていた。某少女バレエ団の顧問役などを秘かに（といっても先生のことであるからすぐにバレたが）つとめられ楽しんでおられた。

私は先生にとっては不肖の弟子であったことを十二分に自覚している。先生への追悼文などとりまきして書く資格はないと思っている。だからこの拙文はあくまで名古屋時代の先生の一つの思い出にしかすぎない。

今頃は、先生も、苦笑されながら極楽で一杯飲っておられるだろうか。